

伊勢湾台風から 55 年

今日は忘れもしない伊勢湾台風から 55 年にあたる。写真は名古屋市が 1961 年 3 月 31 日に発行した『伊勢湾台風災害誌』である。先に紹介した滝子商店街にあった古本屋「オリオン書店」にて 3500 円で(手書きで値段が記載されている)、店の親父さんと伊勢湾台風などの話をしながら買った。

この貴重な資料のまえがきに「被災当時、名古屋市は人口 150 万人余を擁する中部日本の中核都市として、将来の国際的文化産業都市建設の理想に向かって若々しい発展を続けており、さらにその洋々たる前途に多大な期待が寄せられていた矢先、伊勢湾台風によってこうむった被害こそ、理想都市建設の途上にあつた本市にとって、あまたの貴重な体験と教訓をもたらしたものである」と述べる。

写真下は、台風経路などの分布図である。9 月 26 日 18 時頃に紀伊半島潮岬に上陸して、21 時頃に名古屋の西を通過している。じつは伊勢湾台風 50 周年の 2009 年 9 月 29 日のレポートで私の「体験」を語っている。この進路と時間を見ると、当時 11 歳であつた自分の「行動」を思い出す。早めの夕食後、とにかく窓が吹き飛ばされないよう懸命に押さえていた。昔の千種駅近くの「鉄道官舎」であつた。

名古屋市でも南区や港区などでは深刻な事態が続いていた。たまたま三輪和雄『海に吠える 伊勢湾台風が襲つた日』(1982 年、文芸春秋)という本を見つけて読んだ。著者は当時「中京病院」の医師であり、台風の凄まじさと深刻な事態がリアルに伝わってくる。とりわけ「流木」の恐ろしさが。それだけではなく、「人災」といえる伊勢湾台風について厳しく名古屋市の都市計画を批判している。

「人的被害の集中した名古屋市南部の場合、最大の失政は住宅対策であつた。---

名古屋市では住宅よりも道路の建設に向かつていた。--- 産業都市に脱皮することを夢みていた昭和 20 年代のはじめ、名古屋市は市民の所有する土地を強制的に買いあげ、その大部分を道路作りに転用 --- 市営住宅の建設は、名古屋市の中心部を離れた南部の海拔ゼロメートル地帯に集中」

「伊勢湾台風の巨大なエネルギーは、一夜にしてこの文明を破壊し、5000 人にのぼる人々の生命を絶つた。---- この災害の原因は、近代都市の含む根本的な矛盾のなかにもとめられる。」伊勢湾台風と戦後の都市計画・住宅政策については、NHK「金とく」でも報じられていた。55 年前の伊勢湾台風は、戦後名古屋のまちづくりにとつても、忘れてはいけない巨大災害といえよう。



(2014 年 9 月 26 日)